

「難破する」

2016年10月08日

使徒言行録 27章 39節～44節 朝になって、どこの陸地であるか分からなかったが、砂浜のある入り江を見つけたので、できることなら、そこへ船を乗り入れようということになった。そこで、錨を切り離して海に捨て、同時に舵の綱を解き、風に船首の帆を上げて、砂浜に向かって進んだ。ところが、深みに挟まれた浅瀬にぶつかって船を乗り上げてしまい、船首がめり込んで動かなくなり、船尾は激しい波で壊れだした。兵士たちは、囚人たちが泳いで逃げないように、殺そうと計ったが、百人隊長はパウロを助けたいと思ったので、この計画を思いとどまらせた。そして、泳げる者がまず飛び込んで陸に上がり、残りの者は板切れや船の乗組員につかまって泳いで行くように命令した。このようにして、全員が無事に上陸した。

パウロたちを乗せた船は地中海で嵐に遭遇し、14日間も漂流し続けた。陸地に近づいていることを察知した船員たちは自分たちだけで、救命ボートに乗り込んで逃げ出そうとした。パウロは百人隊長と兵士たちに、船員たちがいなくなると、助からないと告げ、ボートの綱を断ち切って、彼らの逃亡を防いだ。乗船者たちは、猛烈な嵐と漂流に翻弄され、不安と恐怖で憔悴し切っていた。パウロは、一同に食事を取ろう、命は必ず守られると励ました。パウロの励ましによって、食事を取り、ようやく元気づいた。

朝になってみると、どこの陸地か分からないが、砂浜のある入り江を見つけた。そこへ、船を乗り入れることにした。錨を切り離して海に捨て、同時に舵の綱を解き、風に船首の帆を上げて、砂浜に向かって進んだ。ところが、深みに挟まれた浅瀬にぶつかって船を乗り上げてしまい、船首が砂地にめり込んで動かなくなった。そして、船尾は激しい波で壊れた。船は大破し、全く動かない状態になった。

兵士たちは囚人たちが泳いで逃げないように、殺そうと計った。囚人たちの逃亡は、兵士にとっては職務の不履行に当たり、責任を問われるが、囚人たちへの処罰は何の咎めも受けないからである。百人隊長ユリウスはパウロを助けたいと思ったので、兵士たちによる囚人たちの殺害計画を思い止まらせた。兵士たちはパウロを囚人と見なしたようであるが、パウロは未決囚である。ローマの市民権を持つ者は皇帝に上訴する権利を有している。その権利を主張したのである。ユリウスは、その事情をわきまえ、パウロを保護した。同時に、他の囚人たちの命も助け、法と正義を全うしたのである。彼は、泳げる者は海に飛び込んで陸に上がらせ、残りの者は板切れや船の乗組員につかまって泳いで行くように命令した。彼のお陰で、全員が無事に上陸することができた。パウロが神の天使から、「パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ」と告げられた通り、誰一人として命を失う者はなかった。

上陸した島はマルタ島であった。クレタ島からマルタ島までは、900 kmほどある。この間、嵐に遭遇し、14日も漂流したのである。乗船者たちは生きた心地がしなかったであろう。その中で、パウロの冷静、沈着な対応は見事という他ない。この航海はパウロの言う通りになり、全ての人が助けられている。使徒言行録の著者は、神に立てられ用いられるパウロに対する祝福の大きさを伝えている。それは、神に信頼する者の平安と勇気を映し出している。